

## 令和5年度 学校評価の考察

松江市立宍道小学校

### 1 集計結果について

#### (1) 教職員の内部評価から

年度当初、今年度の学校経営の力の入れどころとして17項目に及ぶ「教育の重点」を掲げ一丸となって教育活動に取り組んだ。下表は、一年間の教育実践を振り返り学校全体を見渡して行うよう職員に求めた内部評価の結果である。

評価にあたっては各項目の到達度について「とても良い」を4点、「良い」を3点、「あまり良くない」を2点、「良くない」を1点として数値化し、それぞれの合計点を調査対象の職員数で除したものをポイントとして表した。

	項目	ポイント		項目	ポイント
1	育成すべき資質・能力の定着のために、ねらいを明確にした授業を展開する。	3.1	10	安全なくらしに努めさせ、危機回避能力の育成を図る。	2.9
2	個々の児童の学習上の課題を把握し、解決につながる授業のあり方を協働的に研究する。	2.6	11	学校行事の目的を明確にし、感動体験を味わうことができるようにする。	3.2
3	ICTを普段使いする意識をもち、効果的に活用することで学力の向上に資する。	2.9	12	児童一人一人の教育的ニーズを把握するとともに、特別支援教育の視点をもち支援する。	3.1
4	児童の発達の段階に応じ、探究的な学びにつながる指導を工夫する。	2.9	13	児童の不安や悩みを受け止める相談・支援体制の充実を図る。	3.2
5	端末持ち帰りやタブレットドリルの活用を図りながら、家庭学習のあり方を見直し、その充実を図る。	2.4	14	たしかな人権感覚を育み、いじめや差別を許さない人権意識を育てる。	2.8
6	自己有用感を味わわせる活動を取り入れ、落ち着いた学校生活を営めるようにする。	3.1	15	宍道みずうみ学園の一員として、たてとよこの一貫を意識しながら教育活動を展開する。	2.6
7	「挨拶、安全、後始末」をはじめとする生徒指導のスローガンを共有し、繰り返し指導することにより習慣化を図る。	3.0	16	地域のよさを見い出す活動を通して、地域社会と互恵的な関係を築く。	3.2
8	問題行動に対しては必要に応じて毅然と対応するとともに、保護者と情報を共有しながら早期解決を図る。	3.2	17	「時間対効果」の視点をもち、見通しをもった職務遂行を実現する。	2.8
9	自己の健康に関心をもたせ、自己管理能力の育成を図る。	3.1			

各項目のうち3.2ポイント以上のものを「成果が得られた項目」、逆に2.6ポイント以下のものを「課題がある項目」と定義し、以下、それぞれについて簡単な考察を加える。

#### ① 学力の着実な定着に関して

個々の児童の学習上の課題を把握し、解決につながる授業のあり方を協働的に研究する。  
(2.6ポイント、「とても良い」14.3%、「良い」42.9%、「あまり良くない」35.7%、「良くない」7.1%)

年度始めの研究職員会議において研究部から年間の研究計画が提示され、今年度の活動がスタートした。そこでは、近年の学力調査結果から、本校は「特に算数科において、県・全国平均を大きく下回る結果が続いていること」、「とりわけ、知識・技能面に比較して思考力、表現力が十分に伸ばせているとは言い難いこと」、「一昨年度の夏に実施した学力調査分析の結果、教師主導の講義形式による授業スタイルに陥りがちであること」等の諸課題が示された。そこで、このような実態から、児童の思考力・判断力・表現力の伸長をめざすための授業改善の視点として、児童を主体とし

た対話的な学びに重点を置いた授業づくりが不可欠との結論に達し、職員の総意による研究の方向性が固まった。

以降、研究主題「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～学力の着実な定着をめざして～」の実現を図るために、学級担任や授業実践者はもとより、学力向上支援員、特別な支援のための非常勤講師（にこにこサポートティーチャー）等との連携を図りながら協働して授業実践を積み重ねた。職員のコメントに「個別対応の学習補助ができています」、「放課後学習や個人的な学級での放課後学習を行なって、個別の学習上の課題の把握に努め、日々の授業での個別の支援にいかしている」、「個々の児童の課題にあった学習や支援の方法について担任、学力向上支援員、にこサポ、管理職の先生方と相談しながら考え、進めることができた」等の記述があるのは、その一端を表したものであろう。こうした協働的な指導・支援が奏功し、例えば第6学年の算数を取り上げると、昨年度の県学力調査では平均正答率が対県比5.4ポイントのマイナスであったものが、4月実施の全国学力・学習状況調査では対市比でプラス3.0ポイントに転じるなど明るい材料も見受けられた。

しかしながら、「研究授業を通して研鑽が積まれている」とある一方で、「年度当初に児童の学習上の課題について共有したが、協働的な研究をしているという実感はもてなかった」、「授業について研究する機会が、研究授業のみにとどまっている」等の声があるのも事実である。4件法による回答も「とても良い」14.3%、「良い」42.9%との肯定派に、「あまり良くない」35.7%、「良くない」7.1%の要改善派の数値が肉迫していることから受け止めが二分していることがわかる。

次年度以降の学力の着実な定着と向上を志向したとき、これらすべてを研究部任せにすることなく、個々の職員が自分事としてとらえ研究を進めていく必要がある。

**端末持ち帰りやタブレットドリルの活用を図りながら、家庭学習のあり方を見直し、その充実を図る。(2.4ポイント、「とても良い」14.3%、「良い」14.3%、「あまり良くない」64.3%、「良くない」7.1%)**

今年度の教育の重点にはICT活用に関する2つの項目を盛り込んだ。そのうちの「ICTを普段使いする意識をもち、効果的に活用することで学力の向上に資する」ことについては、「全体での情報共有ができず、人によって意識の差があったように思う」、「低学年部ではほとんど活用することができていなかった」という反省も聞かれたものの、「必要に応じて取り組まれている。教員間の教え合いも自然に行われている」、「昨年度までに比べ普段の授業の中でICTを活用する場面を多くつくることができた」、「PowerPoint、Word、Teams等を授業で積極的に活用している」などの肯定的な声が多く寄せられた。評価点2.9ポイント、「とても良い」14.3%、「良い」57.1%と肯定派が過半数に達したことからも、個人により差はあるものの、総じて意欲的に活用したことがうかがえる。

その一方で、本質問項目に対しては、「長期休暇のときしか持ち帰りはしていない」、「各家庭のインターネット通信環境の違いから、端末の持ち帰りはあまり家庭学習の拡充につながっていない」、「低学年部では基本的な学習規律などの指導に時間に多く時間をかけてしまい、タブレットドリルの活用や端末の持ち帰りがあまりできなかった」等の現状から、評価点は2.4ポイントと今年度の教育の重点として掲げた17項目中最も低い評価にとどまった。

## ② 「あたりまえ」をやり切る姿を称えることに関して

問題行動に対しては必要に応じて毅然と対応するとともに、保護者と情報を共有しながら早期解決を図る。(3.2ポイント、「とても良い」28.7%、「良い」66.7%、「あまり良くない」6.6%)

昨年度の学校経営案には、教育相談・支援体制の充実などの「積極的な生徒指導」を前面に押し出し、事案の未然防止・早期発見に努める姿勢を打ち出した。しかしながら実際にはいじめにつながる児童同士のいさかいや不登校・登校渋りの案件、落ち着いて学習に参加できにくい児童の生起とそれへの対応、廊下歩行や服装の乱れなどの学校生活のきまりについての押さえ直しなど、対症療法的な対応に追われる面が少なくなかった。このことから、学校生活のルールの見直しと指導体制の在り方の検討を重ね、児童に自己有用感を感じさせることで落ち着いた学校生活を送らせることと、凡事徹底の姿勢で「よいことはよい、悪いことは悪い」と、毅然とした対応で児童に向き合うことの2点を重視することを職員間で目線合わせした。

その結果、昨年度の問題行動に対するこの項目の評価点は2.9ポイント（「とても良い」が無く、「良い」84.6%、「あまり良くない」15.4%）であったものが、今年度は前述のとおり3.2ポイントまで上昇した。この結果に浮かれることなく好要因を客観的に分析し、次年度以降も維持できるよう努めたい。

学校行事の目的を明確にし、感動体験を味わうことができるようにする。

(3.2ポイント、「とても良い」26.7%、「良い」66.7%、「あまり良くない」6.6%)

この項目についても、昨年度と比較してみると評価点は2.9ポイントから3.2ポイントに上昇している。さらに「あまり良くない」と回答した割合の変容に着目すると、昨年度は23.1%を占めたものが今年度は6.6%にまで低減した。

全校に共通する大きな学校行事としては、1学期の「しんじっ子運動会」、2学期の「しんじっ子発表会」などがあるが、直近の3年間はコロナ禍や職員体制の整いづらさ等による相次ぐ行事の中止、延期、縮小のあおりを受け、職員、児童ともに感動体験を味わう機会が減少していたことは否めない。それが、今年度からは4年ぶりにフルスペックで再開できたこと、また、昭和40年代半ばから脈々と続いてきた本校の特色ある教育活動の「野外活動」を近年は「校内ウォークラリー」に置き換え行っていたが、これも全面的に復活できたことが評価点を押し上げた要因として考えられる。職員のコメントにも「コロナが落ち着き、中止となっていた久しぶりに各種行事を行うことができ、児童のみならず教職員も感動体験をすることができた」等の記述が見られた。

## ③ 教育の重点を効果あるものにする事に関して

児童の不安や悩みを受け止める相談・支援体制の充実を図る。

(3.2ポイント、「とても良い」20.0%、「良い」80.0%)

学校体制が十分に整わなかったことが影響し、昨年度「各担任や養護教諭が主に対処しており、学校としての相談・支援体制が充実しているとは言えない」という声が挙がったこの項目は、一年前は数値としても「あまり良くない」が41.7%あったものが、今年度は「あまり良くない」「良くない」は全く無く、改善が進んだと受け止めた職員が多かったことが明らかとなった。要因として、「保健室、スクールカウンセラーなど、担任以外に悩みや相談事を相談することができた」という声に代表されるように、チームとして対応できたことに尽きる。

一方で、「相談や不登校対応の取組が行われているが、不登校傾向の児童が多い」という切実な声

も挙がり、引き続き対応が求められるのも否定できない。未然防止、早期発見のためにも「自分からは言い出しづらい児童もいると思うので、受け止めだけではなく積極的に悩みを拾えるようにしたい」という声にあるように、児童の思いに気づく感度を職員一人一人が上げ取り組む必要がある。

**宍道みずうみ学園の一員として、たとよこの一貫を意識しながら教育活動を展開する。**

(2.6ポイント、「とても良い」13.3%、「良い」40.0%、「あまり良くない」40.0%、「良くない」6.7%)

昨年度のこの項目の評価点2.2ポイントから若干評価が上昇したものの、今年度も2.6ポイントと全体の中では必ずしも肯定的に受け止められていないことが明らかとなった。内部評価の自由記述に「幼稚園や特別支援学級は交流ができていた。全体会が一度あって講演を聞いたが、各部会での話し合いがなかったためあまりつながりを意識しなかったのではないかと思う」との振り返りがあり、他の職員も同様の思いを抱いたことが想像される。

「学園で何かしなければならぬから」という意識では活性化は難しいことから、学園内の各校・園が相互に連携し、課題を出し合い、それぞれの教育・保育活動に役立つ事業を検討、展開していく必要に迫られている。

**地域のよさを見い出す活動を通して、地域社会と互恵的な関係を築く。**

(3.2ポイント、「とても良い」26.7%、「良い」66.7%、「あまり良くない」6.6%)

外部との連携がキーワードとなる点では上記の学園に係る項目と共通しているものの、こちらの項目については高い評価を得た。昨年度は、本校版地域課題解決型学習のあり方を研究することを求めるなど、職員にとってハードルが高い内容へのとまどいがあったか、評価点は2.5ポイントと低かったが、今年度は3.2ポイントまで押し上げた。

ただし、自由記述を見ると「各学年で宍道の町の中に出かけたりボランティアさんを招いたりして、地域学習が活発に行なわれていた」、「総合的な学習の時間など、地域の方にお越しいただいてお話を聞くなど、地域の魅力を子どもたちが感じられる学習ができている」などの肯定的な振り返りがある一方で、「地域と関わる機会が少なかった」、「第3学年と第5学年の総合的な学習の時間が同じようなものになっている」等の反省も聞かれ、職員間の評価に温度差があることが浮き彫りとなった。

## (2) 児童アンケートから

例年に引き続き、挨拶、言葉遣いなどの『ふるまい』、授業態度、進んで発表、家庭学習、読書などの『学習習慣』、履物の整理、廊下歩行といった『きまりの遵守』、歌声、運動などの『心身の健康』の4つのカテゴリーについて計11項目を児童に訊ね、その結果を集計した。

まず特筆すべきは、昨年度と同率だった「読書」を除き、他の10項目はいずれも肯定的回答の割合が昨年度を上回っている点である。数値の大きいものから並べると、「学校での学習には一生懸命取り組んでいる」(94%)、「くつ箱やトイレではきものをきちんとそろえている」(91%)、「進んで体を動かし健康に気をつけている」(90%)と90%台が続き、心身ともに健全に、かつ身の周りを整えて学校生活を送ろうとする児童の姿が見えてくる。また、「今月の歌や行事の時の歌を大きな声で歌うことができる」(68%→85%:17ポイント増)、「家での学習を自分から進んでしている」(67%→81%:14ポイント増)など、周囲から強制されなくても自ら進んで取り組もうとする項目に大きな伸びが見られたことが判明した。

昨年度はあらゆる面において様々な困難に直面しながらの教育活動であったが、今年度は状況が改善したことから職員の意識が揃い、結果として児童に向き合うことができたことが好結果につながったことは想像に難くない。

### (3) 保護者アンケートから

保護者アンケートは、一家庭あたりきょうだいがいれば人数分回答してもらう「わが子の様子」について訊ねる項目と、一家庭について一回答してもらう「学校教育活動」について訊ねる項目の2つのカテゴリー、計24項目により構成した。

まず肯定的な回答に着目すると、全24項目中実に22項目において昨年度を上回った。すべてが後手に回った昨年度から一年をかけ、ようやく本来学校がめざすものを取り戻すことができたことを保護者に認識してもらえたことは、極めて感慨深いものがある。特に、保護者の信頼無くして安定した学校づくりは不可能であるという意識から、今年度の最重要項目として注視した3項目、①「一人一人に配慮した指導」(学校は、一人一人の学習の進み具合や興味・心を配慮した指導を行っている)は肯定的回答の割合が65%から88%、②「保護者との連携」(学校は、保護者の意見を聴き、連携を図りながら活動しようとする姿勢がある)は73%から91%、③「子どもへの適切な対応」(教師には、子どもを受け止める姿勢があり、場合によっては毅然とした態度で対応している)は74%から91%と、いずれもその数値を大きく回復することができた。

また、自由記述(任意)にも様々な意見・要望をいただいた。即対応すべきもの、要望として受け、中・長期的な視点で改善に生かしていくべきもの等に分類・整理し、必要なものは保護者と連絡を取り合い理解を得たり、関係機関と連携すべきものは各方面に協力を要請したりした。意見や要望、問い合わせ等は学校評価の機会だけではなく、日ごろから気兼ねなく保護者から示していただけるよう、一層の関係性の構築を図る。

## 2 改善の視点

学校評価の目的は、学校経営の成果と課題に照らして理想とする学校を創造する、いわば「学校力を上げる」点にある。大阪大学の志水宏吉教授によると、力のある学校は、①「まとまりのある教職員集団が特色ある学校運営に協働して携わり」、②「整えられた学習環境の下で保護者・地域との連携を図り」、③「それらに支えられながら、学習指導・生活指導等の教育活動を展開している」ことが共通しているという。次年度以降もこれらの充実を図るべく明確な学校経営の方針を打ち出し、児童が「明日も行きたい」、保護者が「安心して通わせたい」、地域が「協力したい」と感じることができる学校づくりに努める。

### (1) 「まとまりのある教職員集団が特色ある学校運営に協働して携わる」ために

昨年度の反省に立ち、組織として最も大切にしたい姿として「心理的安全性が図られる職員室づくり」を年度当初の職員会議において掲げ、職員の理解と協力を求めた。今や教職を取り巻く過酷な勤務環境が社会問題化しているからこそ、「チームメンバーに非難される不安を感じることなく、安心して自身の意見を伝えることができる状態の職員室にしていこう」と呼びかけた。

年度半ばに職員に対して行ったストレスチェックの結果を見ると、低いほど望ましいとされる「心理的負担(量)」の値は、市平均9.8に対して本校は9.4、また「心理的負担(質)」は9.3に対して9.0、「対人関係ストレス」は5.7に対して4.8、「抑うつ感」は10.6に対して9.2と、いず

れも相対的に健全な数値であることが判明した。逆に、高いほど望ましいとされる「働きがい」は市平均3.2に対し本校は3.5、「上司からの支援」は8.6に対して8.8、「仕事生活満足度」は6.1に対して6.5と、ここからも職員の精神的・身体的な疲弊の度合いは昨年度に比べ低減するとともに、職務に対する満足度は市全体から見ても決して遜色のないものであることが明らかとなった。

今年度の評価結果は総じて昨年度を上回ったことから、心理的安全性のある組織づくりを掲げたことは決して誤りではなかったと振り返る。したがって次年度以降も学校経営の柱に位置付け、職員一人一人が安心してものが言え、個々のやりたいことができ、自分らしさを発揮できる職場づくり、学校づくりを推し進める。

## (2) 「整えられた学習環境の下で、保護者・地域との連携を図る」ために

保護者、地域との連携を図ることは教育活動を円滑に進めていく上での基盤であり、保護者・地域の協力を得ることで学校教育の質は向上していく。家庭訪問や学級懇談、個人面談等も大切な場ではなるが、むしろ日々のなにげないやりとりの中で相互理解は生まれ、深まり、いざというときに学校の応援団になっていただけることをわれわれは経験から学んでいる。次年度以降もPTAとの連携を一層図るなどにより、フラットな対話の場を積極的に創出していく。

さらに、学校教育を理解してもらうためにはさらなる情報公開を進める必要があり、そのツールとして今年度はほぼ毎日学校ホームページを更新した。指導の最前線で格闘する担任は、学級だよりを発行しそれぞれの取組を紹介することで理解を求めているが、ある程度負荷のかかる業務になっている。次年度以降も“毎日が授業公開日”のスローガンのもと、ホームページや学校だより等で積極的に学校を開く姿勢をもち、保護者・地域と学校の理念の共有に努める。

## (3) 「学習指導・生活指導等の教育活動を円滑に展開する」ために

学習指導に関する重点目標「ICTを普段使いする意識をもち効果的に活用することで学力の向上に資する」に対する内部評価に、「学力の向上に資するかどうかは不明」という懐疑的な声があった。もちろん、それは単なるツール（道具）であることから、その存在だけでは到底学力の向上を図ることはできない。ここで大切なのは、これまでの授業スタイルを振り返り、授業改善に向き合うための項目であることへの気づきである。教え込みから脱却し、児童相互が思考を表出し合う際のファシリテーターとして児童を支えることができるのか、また、その際の効果的な学習ツールとして機器活用ができるのかを問うているのである。そうした点で、不登校傾向の児童宅と教室を結びタブレット端末の活用を図った教員や、全家庭がWi-Fi環境にないことを言い訳にせず、まずは端末を持ち帰らせ、できることからさせてみようとした教員が見られたことは大いに評価したい。

他方、学習指導のみならず、生活指導等（生徒指導）の面でも人材育成を図ることは喫緊の課題である。不登校・登校しぶりはもとより、重大事態に陥る案件こそ見られないもののいじめにつながる事案はどの学校においても見られる。組織全体の問題としてとらえることは言うまでもなく、今年度は教頭が対応の矢面に立つ場面が多くあったが、本来は個々の職員が「対応力」を身に付けることが必須である。課題の未然防止、早期発見、早期解決、再発防止に生きる力量を身につける研修体制の構築が不可欠であるが、本校の強みとして今年度獲得した心理的安全性を発揮しながら今後ともOJTによる個々の資質向上を図り続けていきたい。